

以上の漁獲高は、先に述べたように、牛深市だけの実績であり、この外天草全域を含めると、その魚獲見込高も、あるいは、二十四、五年ごろの上昇線に向って近づいてゆくのではないかと、少からぬ期待がよせられているわけだ。

しかし、これまでの漁業不振の原因が海況の変化だ。乱獲だ、週期的なものだと騒がれておりながら、これを決定づける何の根拠も持たないために、この状態はいつ落日になるのか、また大へん心配なことではあるのです。

——販路は九州一円——

小型動力船が行き交い、その律動音が何となく活気を呼ぶ牛深港。その海岸沿いにあるH水産K・Kのドアを叩くといかにも海の男タイプと云われそうな青年取締役が姿を現しました。加工場の空地には、干いわしの大群が、それぞれ一メートル四方の平たい箱におさまられて初冬の陽差しをさんさんと浴びながら、銀色にかがやいています。(写真)

「これは、今朝揚つたばかりなんです。そうすね、せいせい二百貫ぐらいいのもでしよう……」

と前置したその日の水揚高は、「まいわし」が八百貫であつたそうです。先週の二百貫に較べると、今週の方がずいぶん良かったわけだ。魚は陸揚げすると、おそくとも三日目には取引がすんで分散されてしまいます。大体陸揚げの三〇パーセントが加工に廻され、残りが鮮魚船に引き渡されて、鹿児島県の阿久根や三角を経て九州一円に出廻るのだそうです。この会社が所有する片手巾着網漁船一統のメンバーは、一隻が千八百万円もす



「……そうすねいわし、あじ、さばをひつくるめて三万貫、金額にして四、五百万円というところでしょうかね。一統を構成した私たち業者は、年間に二千万円ほど水揚げしなければ成り立たないのですよ。最低六七十人の乗子を抱えているんですからね」と、思案顔です。

しかし昨年はどうやら十一月までには、牛深の網元全部が万越し(一百万貫以上の水揚高)の祝いをすませているそうで、先づこれは朗報には違いないようです。

この空地の片隅に土蔵のような建物が立つており、そのうす暗い床の上には真白い毛布のようなものが重ねてありました。訊ねてみますと、これが会社の唯一の生命財産とも云える「クレモナ網」だそうす。

数年前から、漁業経営の改善のため、化学繊維網の導入が叫ばれてきました。たしかに、従来の綿糸網は、消耗度がひととき目立ち水きりが悪いために、網干しの時間的なムダや、それを干すための網干棚の設備費などに喰われる経費は莫大なものであつたのです。そこで、このH水産でも、四年前にアメリカからの見返導入資金で、価額六百万円を投じて「ナイロン網」を使用して見たのですが、これが意外にも、破網という失敗に終り現在その「クレモナ網」に切り換えているところなのです。この「クレモナ網」というのは、倉敷レヨンビニロンの製品で、価格もかなり安く、何よりも綿網に較べて数倍にも増して強いということが、水きりが良いために腐蝕することがなく、網干しが要らないのが特色なのです。つまり、これまでの綿網などの欠点をすべて補っているところに魅力以上のものがあり、これが操業の実績と機動力を倍加させている原因でもあるのです。

望まれる共同経営

さて、この化繊網への切り換えを手始めとする漁業経営の改善合理化問題に向つて、それぞれの水産業者が一樣に歩調を進めてゆくことは、極めて現実性を欠

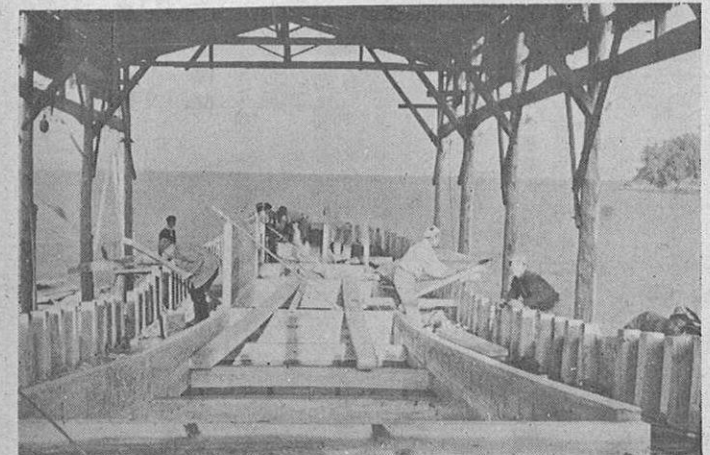
いた難題であると申せましよう。漁業者の経営内容とその実体は、個々によつて大きな差異があり、これに伴う資金の問題も、現在では、相当深刻なところに来

ているからです。「農林中央金庫」という水産関係の系統金融機関がありながらほとんどその融資の例をみていないと云うことは、やはり、水産漁業者の結束の漁協を通して、健全に突つていないという事実起因していると云えましよう。このような事実は、もはや「漁業経営の合理化や改善」とかいうお題目よりも一歩先んじて解決してゆかねばならない、極めて本質的な要素を含んだ問題であると考えられます。

つまり、漁業者間の結束を阻むようなセクシヨナルな数多くの問題を深く捉えて、そこに伏在する利害や無益な競争などを少しでも多く取り除き漁業経営の内容に応じた利益と生活の安定とをめざすよう、すべての水産漁業者の方々が認識し努力しなければならぬのです。

そこで、このよ

うな結束の態勢へもつてゆく方法として、漁協を通じて共同販売や共同加工などが考えられるのです。こ

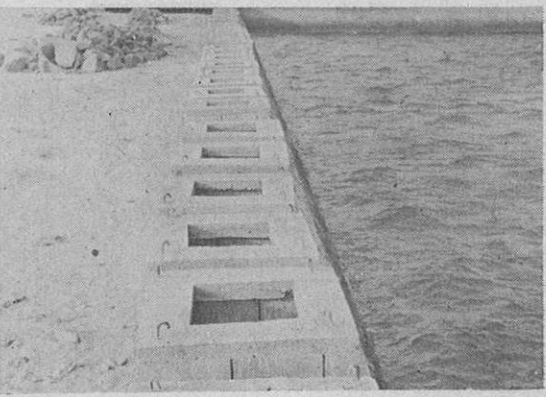


れが漁協の運営と組織体を強化させてゆく原因でもありましよう。そして、販売された益金の何割かを、漁協に蓄えてゆけば、自然と漁協自体の弾力的な財政が確立されてゆき、又漁業者の方も販売格付値段の維持によつて、むやみなダンピングが避けられて、自己資金の準備も多少なりと実現されてゆくことになるのです。このような漁民と漁協との緊密なつながりができてこそ、漁業の建設資金や運転資金に対する融資も、漁協を通じてスムーズに行われ、ひいては、今後の漁業不振に備えての厚みのある打開策や

漁業転換の道もひらかれて行くものと申せましよう。

写真
本造船の誕生 明治二年創設 郡内二十余の本造船所で最も古い鬼池のF造船所では今六〇トンの木造船がつくられている。一隻の建造費四〇〇万円 (上)

写真
魚のアパート 魚の産卵をふやすためにつくつた魚巢でタテヨコ高サ各一米の鉄筋コンクリート造り。これを沖合五〇〇米の海に三五米の間かくで投入する。中は十字の壁に仕切られ、四壁には魚の出入りする穴が二つずつあけてある。写真は鬼池海岸で投入前の魚巢だが大矢野町や五和町でも建造中。(下)



情熱詩人山陽

雲か山か呉か越か
水天ほうふつ青一髪
万里船を泊す天草の灘
(原漢文)

云々の詩は、頼山陽の絶唱として天下に流布しているが、蒼北町富岡の海岸、はまゆふの咲く砂原に建てられたその詩碑は、同地を訪うものの見のせないひとつ。

外海に面した碑前に立つて、遠く大陸の雲を望むと、幕末の情熱詩人山陽の感傷がよみがえ

若き歌人の旅愁

天草大江の教会堂は、そのエキゾチックな尖塔がよく写真のテーマにとられているが、明治四年キリシタンの禁令がとかれて、同十二年仏人宣教師によつて、いち早く再興された土地がらだけに、信者の数も多い。こゝに建てられている石碑

白秋とともに泊りし
天草の大江の宿は伴天連
(パレレン)の宿 吉井勇
は、氏が若き日、北原白秋・平野万里らとこゝに訪れた時の旅愁の歌。

眼を贈つた海南の歌

この間亡くなつた下村海南氏(元国務相・国立公園審議会議長)は死後眼の角膜を盲人二人に贈つて、さらに話題をつくつたが氏は歌人としても有名で、生前天草に遊んだ時本渡市丸尾が丘を訪ね、キリシタン文化のあとを叩つて

このあたり天草学林のあとといふ あら草にまじるコスモスの花

の一首を詠じた。この歌は石碑に刻されて現地に建っている。